

まちづくり①

# 商店街に蘇る 「昭和三十年代」の面影

山形・高畠町中央通り商店街「昭和ミニ資料館」





広介童話の主人公たちが石像になって通りのあちこちに立っている。



元球客室が小学校の教室になった。  
「設計の[学校中央通り分校]という名前も掲げている。

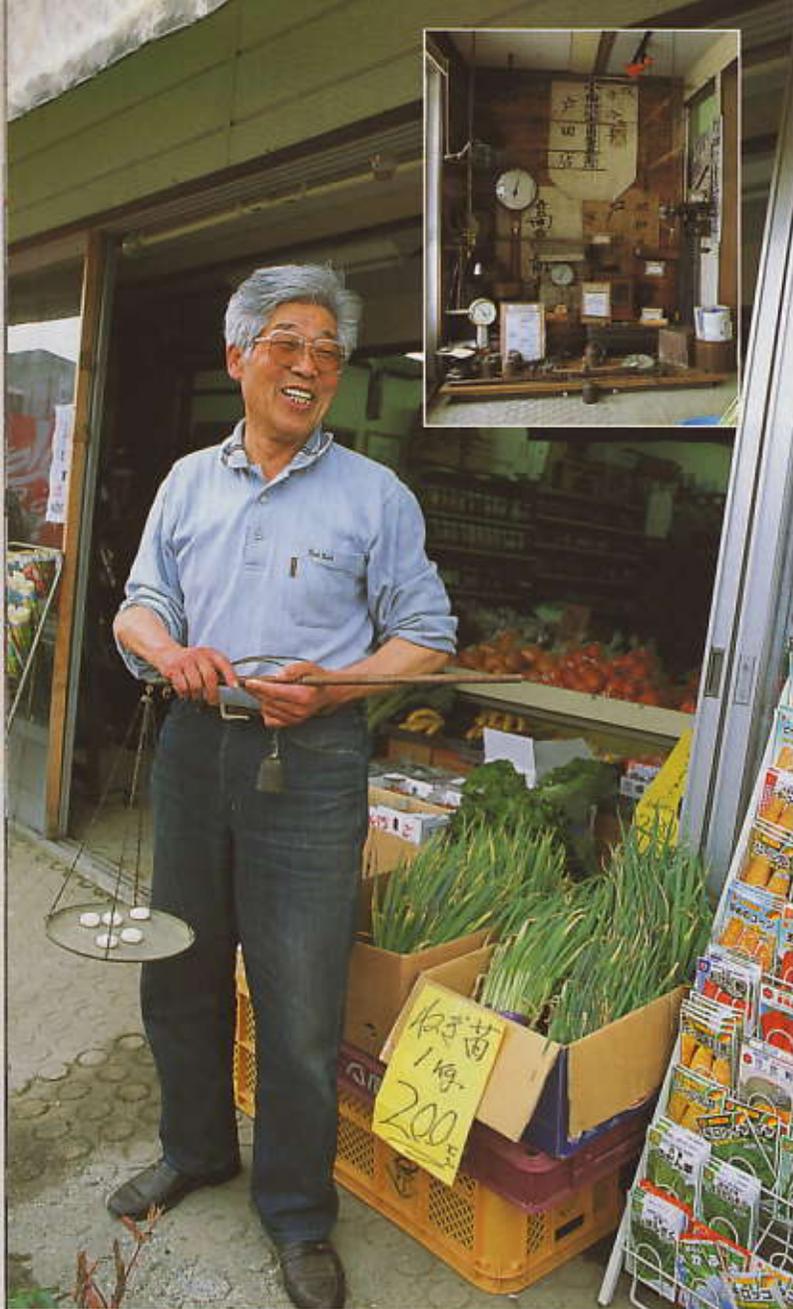
各商店の店内に、昭和三十年代の生活用品や電化製品、雑誌やマンガ、当時の小学校の教室などが展示・再現されている。山形県の「高島町中央通り商店街」(会長・古川和夫さん)の昭和ミニ資料館だ。

展示品は、八百屋さんでは秤類、お菓子屋さんでは菓子作りに使った型など、商売柄によるものや、奥さんが東京オリオンピクニックの陸上選手だったことからオリオンピクニックにまつわるものを展示するなど各商店の個性が活かされている。

軒下には各店の主力商品をモチーフにした手作り木製看板が掲げられている。そは屋を営む伊澤光明さんが、趣味の木彫を活かして一手に引き受けている看板で、なかなかの女人はだした。

これらのアイデア実現を裏方として支えてきたのが、高橋正人さん。積極的にまちおこしに取り組むアイデアマンだ。家業の高砂屋珈琲店を営む傍ら、商店街の活性化に日夜知恵を絞っている。

新幹線開通にともない大型店が出店し、メインストリートが移る中、高橋さんは、潰れた映画館から引き取りためていた千枚の映画ポスターを「活性化のきっかけに使えないか?」と思索していた。その時思いついたのが昭和ミニ資料館だ



小さな木造家屋の資料館。中には丸いちゃぶ台に足踏みミシンなど、レトロな生活用品が展示されている。



お田子屋さんの高橋初子さん。「資料館のお陰で、お客さんとのふれあいができて楽しい」

った。高齢化が進む今、高齢者が青春時代をすごした昭和三十年代を商店街に蘇らせ活気を取り戻そうと、三つの商店からスタートした。昭和三十年代といえは高島町には製糸工場があり、人の数も多く、商店街も一番活気にあふれていた。「明治時代の骨董品を蒐集するには高すぎるけど、昭和三十年代のものだったらごろごろしている。元々ゴミ扱いされていたものをいわば再生するんですから」と高橋さん。

「捨てよう、捨てようと思いつながら、たまたま取っておいたものがこんなふうにな役立つなんて、夢にも思わなかった」と十七号館館長の高橋初さんは笑う。

しかし取り組み始めた頃は、「高砂屋の倅がまたバカなことを始めたよ」と言われ続けたという。一店一店を回り三年で十七館まで増やしてきた。今では、サクランボの季節に観光バスも立ち寄る。名所となり、資料館のことを知った町外の人が「うちにもこんなあったよ」と貴重な資料を持ってきてくれることもある。

どの商店でも店頭で展示品を覗いていると、「どうぞ中に入ってご覧下さい」と気軽に声をかけてくれる。いろいろと



縄文人が暮らした洞窟が発見され、土器や人骨も出土した。



質問をしてみるのもいいだろう。店を出るときには「おしようしな（ありがとこ）」と山形弁で声をかけてくれる。商店街ぐるみでのどかな雰囲気を出すちよっとした心配りだ。高橋さんは言う。「旅行の楽しみの八割は地元の人とどれだけ話ができるかだよ。だからこの商店街では旅人とのふれあいを大切にしている」。

さらに、商店だけの取り組みでは昔の町の雰囲気は出せないと、昔ながらのゴミ箱を設置したり、石塀を板塀に代えてもらえるように住民との折衝にも乗り出している。

商店街を歩くと歩道脇の石像が目につく。町出身で「泣いた赤鬼」などで知られる童話作家・浜田広介の作品にちなんだ高皇石の石像だ。製作は商店街近くで石材業を営む引地謙二さん。アイデアにほだされボランティアで取り組んでいる。

また、歩道脇にならぶ石のプランターには年二回住民総出で花を植え、商店街に彩りを添えている。美観を損ねる電信柱も歩道から個人宅敷地内に移設した。「若い者が町のために頑張っているんだから」と地権者も移設に快諾してくれた。

■連絡先 高砂屋珈琲店

TEL 〇三三八—五二—〇三五四